

➤ 焼け跡闇市時代に帰国

日本敗戦時の由比忠之進の心模様を、友人のエスペランチストである伊東三郎(『エスペラントの父 ザメンホフ』岩波新書/著者)はこう書いています。

「惨憺たる敗戦に自信も生活も粉碎された。数か月は幽霊のような放心虚脱のうちに過ぎた。戦争が何であったか、やっと判ってきた。残酷に他を殺害し、自らも滅亡する罪悪であることを知った」。

中国の要請もありましたが由比は、日本が犯した中国への罪を償うため、また中国の新しい国づくりに貢献したいという思いで、自ら進んで技術者として中国に残りました。

由比はひとり中国に残りましたが家族たちは1947年2月、日本に引き揚げました。由比の娘・正子は、「父は余りにも身勝手すぎる」と怒ったようですが、家族は当初、由比家のある福岡県前原に身を寄せ、生活するようになりました。

由比自身は1949年9月、日本の舞鶴に引き揚げてきました。20日ほど入院した後、当時横浜にいた妻や長男らが待つ家に帰ってきました。

東京や大阪などの大都会は焼け野原、まさに焼け跡闇市時代です。しかし日本エスペラント学会の当時の事務所は東京の文京区本郷元町にあり、戦火を免れて残っていました。事務所の南は神田川沿いの外堀通り、北には水道局の給水所があったので、その一角だけが焼け残ったのです。

敗戦後の日本では、何人かのエスペランチストが長谷川テルの消息を気にしていました。そのひとり三宅史平は、敗戦翌日の8月16日にはエスペラント運動を再開すべく活動を開始し、中国東北部(満洲)、台湾、朝鮮など海外を除く日本にいる会員646人に、「今後の運動方針」を問うアンケー

ト調査を実施しました。しかしそのうち、100通ほどの手紙が宛先不明で返ってきました。

➤ 由比、エスペラント学会を訪ねる

1949年11月9日、その日本エスペラント学会に由比は三宅史平を訪ねました。

エスペラント小辞典などの著作もある日本有数のエスペランチスト・三宅はずっと気にかかっていたテルの死を聞きましたが初めは、由比の話に疑問に思ったようです。しかし由比の話を聞くうちにそれは確信に変わりました。三宅はこう書いています。

「長谷川照子という、その人の本名さえ知らない由比の話も、よく問いただしてみれば、疑いようもないことであった。ソヴィエトか中国かの同志に出あいはしないかと、いつも緑星章をつけ、また、接する人ごとにエスペラントのことをたずねたが、たった一人中国人のエスペランチストに出あった。『この人が緑川女史の義弟であった』と由比さんは話されたが、緑川とは、長谷川照子さんの匿名であり、その人の夫は、たしかに劉姓の人で、東北の人であったから、人ちがいではない」。

➤ 由比、一燈園に入る

由比の人生は戦後も波乱に満ちたものでした。理想主義者であった由比は敗戦後の日本で新たな模索を続けていたのでしょう。ザメンホフの「我々は人類の一員である」という人類人主義、いわゆるHomaranismo(ホマラニスム)に共感していた由比はさまよい続けていたのでしょう。

そして由比は突然、家族の前から姿を消したのです。帰国した翌年の1950年のことです。長女の正枝は、「どこへ行ったか分からず、家族は心当たりの場所をみんなで手分けして探したが、まったく居場所が分からなかった」のです。

第十三回 さまよえる理想主義者・由比忠之進

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるいよしひろ)

今で言う蒸発です。由比は若い時から理想主義者として生きてきました。家族の眼には「父は余りにも身勝手だった」と映ったとしてもやむを得ないかもしれません。

由比はどこに行っていたのでしょうか。実は京都にある「一燈園」に入っていたのです。

一燈園は1904年(明治37年)、思想家、宗教家ともいえる西田天香が京都市山科区に創設した修練道場です。天香が唱える「懺悔の心」を持って、無所有の共同生活をして奉仕・托鉢を行う精神修練の集団です。一燈園の人々は街に出て、見知らぬ家を訪ね、その家の便所を掃除するということで知られ、今でも存在し多方面で活動しています。

戯曲『出家とその弟子』で知られる劇作家の倉田百三や俳人・尾崎放哉なども一時、一燈園にいたことがありました。一燈園の“人は自然にかなった生活をすれば、何物を所有しなくとも、また働きを金に換えなくとも許されて生かされる”という考えは一部の人々を引きつけました。

由比は一燈園で、午前4時から1時間ほど仲間と一緒に荷車を引いて京都の街に出ます。そして料理屋の残飯を集めます。豚の餌にするためです。また前述したように、よその家に行って便所掃除などをしたりして、お布施で生活をしていました。

▶ 名古屋でのエスペラント活動

しかし東京高等工業時代の友人が由比を探し出し、説得して一燈園を辞めさせ、名古屋の八千代電設に入社しました。結果的に由比の一燈園での生活は一年ほどでした。

名古屋は戦前、由比がエスペラント活動をしていた地であり、エスペラント関係の友人知人も多かったところでした。離ればなれになっていた家族、妻と三男の亨の3人で由比は名古屋で生活をするようになりました。その後、友人の紹介で名古屋中央放送局に勤めました。由比の仕事は視聴者から持ち込まれる壊れたラジオを修繕することでした。由比は、当時の日本では最先端の電気の技術と知識を持っており、大変評判が良かったようです。

真面目にサラリーマン生活を続けながら、仕事を終わるとエスペラントの講習会や会合に出かけていました。名古屋は戦前からエスペラント活動が盛んな土地でした。反骨のジャーナリストとして知られる桐生悠々は、『新愛知新聞』の主筆として健筆を振るい、エスペラント運動の強力な支持者の一人でした。また『名古屋新聞』の主幹、柴田義勝は東京での記者時代、神田のエスペラント社で由比と共にエスペラントを学んだ仲間でした。

▶ 朝鮮戦争勃発

1950年6月、朝鮮戦争が始まりました。アメリカのトルーマン大統領は、韓国軍を援助するために海空軍に出撃命令を下しましたが、最終的に翌年の7月休戦会談が行われ、朝鮮半島は南北に分断され冷戦構造が残りました。ベトナム戦争もまさに冷戦構造の産物でした。

このような状況のなか、1953年9月4日、オーストリアで「平和を守るエスペランチストの国際集会」が開催されました。三日間の会議の結果、生まれたのがMEM(メム)、「世界平和エスペラント運動」です。

MEMの宣言文はこう記しています。

「人間殺戮の新たな危険はいつも目前にあります。このゆえに平和運動の勢力は常に、戦争計画者の動きを見守らなければなりません。平和を愛するすべての者が、人民が、組織され、平和を守るために立ち上がった時にだけ、戦争計画者の新たな戦争をくい止めることができます。戦争と平和に関して、どんな『中立性』もありません。私たちのもっとも重要で直面する任務は平和を守ることです。平和を守ろうとするエスペランチストのグループや個人を結集して、国際補助語エスペラントを、この運動に役立てながらも、独自に組織された勢力として、平和運動のなかで活動しなければ、という考えが生まれてきました」。

世界のエスペランチストが連帯して世界平和に貢献しようと宣言したのです。